

---

# 緋色の記憶

布袋しぐれ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋色の記憶

### 【Nコード】

N3890Z

### 【作者名】

布袋しぐれ

### 【あらすじ】

突然失った幸せの日々。同胞たちは、すべて瞳を奪われ、殺された。その瞳のために、殺された。

闇市場で高値で取引される、『緋の目』のために。

許せない、絶対に取り返してみせる。

生き残った、私たちふたりにかせられた、使命。きっとこれが運命。

## 偶然の出会い

殺された、いなくなった、同胞たち。必ず、仇をとると、幼馴染は言った。必ずや、この同胞たちの目を、取り戻してみせると。

私たちは、特異な民族だった。感情が高まると、瞳が鮮やかな緋色に変化する。それゆえに、苦勞することは多かった。闇市場でかなりの高値で取引されていたことは、周知の事実だったから。私たちは、自分の身を守るための、護衛術は心得ていた。この血は、途絶えさせてはならない。とても、小さな頃、そう長は言っていた。記憶に残っている。

その翌日、私たちクルタ族の同胞たちは、目をひとつ残らず、奪われた。

目の前が真っ赤になった。生き残ったのは幸運だった。幼馴染と、たまたま少し山を越えた向こうに、出かけていたから。食料を、探すために。力が抜けたように、籠が手から滑り落ちた。

「・・・父さま・・・？」

「・・・幻影旅団の・・・し・・・」

「クラピカ？」

「くっそ・・・幻影旅団の仕業だ・・・」

「・・・なんでそう言えるの」

「前に聞いた、長おさからも・・・同胞が、襲おさわれたと・・・蜘蛛の刺青の入った、やつに」

「・・・それって・・・」

「・・・ああ・・・そのときも、目は奪われていた・・・居場所が、バレていたんだな」

「随分と、冷静ね」

「・・・いいや、冷静に見えるか？」

「分からないわ・・・私、もう目の前真っ赤だもの」  
「私もだ」

「・・・クラピカ、私たち、どうすべきなのかな？」

「目を、取り戻そう」

深いため息を同時に、クラピカは小さく、それでも力強く言った。  
次第に感情も落ち着いてきて、目の前がクリアになる。頭に血が上ったせいか、少しぼうつとするが。

「どうすればいい？」

「どうすればいいのか、分からない」

「・・・私、闇市に紛れ込もうか？」

「ば・・・そんな危険なまねをするなっ」

「うーん・・・でも情報は入れられるかもよ？その、幻影旅団？  
の情報も手に入るだろうし」

「何を考えているかと思えば・・・くだらないことを言うな」

「でも、それ以外に、方法ってある？」

「・・・それは」

「いいの、私なら大丈夫。クラピカの心配には及ばないわ」

「・・・心配はしておらぬさ」

「まあ、随分なもの言いね」

「クルタいちの術師が」

「護衛術だけだね」

「・・・連絡は必ず、取り合おう。週に一回は、かならず・・・  
そうだな、ここで」

「・・・危険じゃない？」

「大丈夫なのだろう？」

「分かったわ、クラピカ」

「ああ」

「・・・ねえ、クラピカはどうするの？」

「私か？私なら心配ないさ。情報を集めるよ」

「・・・集める？」

「ああ」

多分、これがきつかけだっただろうな。

私たちはそれぞれ分かれて、この日以来、一週間ごとに会っては、情報を交換していた。最も、ほとんど収穫はなかったのだが。

しかし、その生活が数ヶ月続いた、ある日、会うことはなくなった。来る日も、来る日も待っても、クラピカは来なかった。何があったのか、聞く術もなく。私たちは、共に17歳になった。

闇市場は、反吐が出そうなほど、気持ちの悪いものの好きの連中もいる。黄色の髪色に、茶色がかった瞳。この容姿だけでも、十二分に目立つというのに。クラピカに最後にあった日に、貰ったカラーコンタクトをいれていても、やっぱり目立つものは目立つ。

「お嬢ちゃん、君、いくら？」

「・・・売り物じゃないわ」

「機嫌が悪いね、どうかしたのかい？前の客の気前が悪かった？私はその10倍はだそうか？」

「うるさないあ・・・売り物じゃないって言っているのが聞こえないの」

「ん？」

「こんの・・・腐れ変態野郎！」

「うつがうつ！？」

男の顎に蹴りを入れると、一瞬、顔が緩んだ。とんだ変態だったみたいだ。とりあえず、ひと安心。

「お見事」

「誰？仲間？」

「いいや。ボクはただの通りがかり」

「何？」

「素晴らしい蹴りだったね、何か習っていたのかい？」

「まあね」

「そうか、いつかお手合わせ願いたいものだ」

「（そんな真面目なヤツに見えない・・・）いいわよ、私はマリ  
ア」

「うん、マリアね。ボクはヒソカ」

「・・・ふうん・・・」

「それにしても、君、随分と若そうだけれど？」

「失礼ね、もう１７よ」

「ここがどこか分かってる？」

「分かっているわ。愚かじゃない」

「愚かじゃなかったら、ここにいないんじゃない？」

「事情って人によるでしょう」

「・・・うん、そうだね。気に入った。お茶でもどうだい？疲れ  
ただろう？」

「・・・いいわよ」

偶然って、本当に恐ろしいものね。

## 柔らかな微笑み

オレンジ色の、さらっとした髪を、風にたなびかせるのを楽しむかのように。かすかに、目を細めたように見えた。

重たげな二重が、ゆっくりと瞬きして、また私を捉えた。目の端とか、そんなんじゃないかって、きちんと。

「・・・何？」

「いや、別に」

闇市場から抜けた、少し洒落たカフェテラスに座っていた。アンティークな椅子と、茶器。普段の生活からは程遠い場所だ。

「さつきから・・・何？」

「つれないなあ・・・クツクツ・・・」

「（気味悪いなあ）」

「・・・君、あそこになんで居たの？」

「言えない。企業秘密ってやつかしら」

「・・・企業？」

「（まずい）所属はないんだけど」

「ふうん」

「あなたこそ」

「ボク？ボク、暇だったから・・・変わったものでもないかなあ・

・  
って」

「・・・娼婦おんなでも探してるのかと思った」

「んゝ、そう見える？残念、かも」

「・・・そうには見えないけれど」

「まんざら、間違いでもないけれどね、ボク、変態らしいし」

「・・・昼間からジョークが過ぎるわ」

「よく仕事仲間に言われるんだよ」

「気にする必要もなくて？」

「・・・そう言ったの、君が初めてだよ・・・可笑しい」

「・・・あらそう」

じつと食い入るように見られることは少ないからか、少し変な感じがする。

「元は良いのに」

「え？」

「ううん、なんでもない」

「顔に何かついてる？」

「そういうのじゃないよ、気にしないで」

「・・・気になるわ」

「君、元は良いのに。飾らないのかい？それくらいの歳だろう？」

「うーん・・・気がついたら、この歳って感じだから・・・分かんないなあ・・・」

「そっか・・・」

「何？」

「いいや」

そういうと、ヒソカは初めて、ともに目線をはずした。初対面の男に、ここまで口を割ったのは初めてだったから、少し疲れた。

「あなた、いつまでいるの？」

「ん？さあ」

「少し、寝ても良い？」

「今かい？」

「うん」

「ここじゃ、少し目立つからね・・・いいよ、寝てても。けれど、移動してても勘弁してくれるかい？」

「うーん・・・場所によるけれど・・・」

それよりも、眠たさのほうが、確実に勝っていた。

どうでもいいさ。成るようになるだろう。別に、危機感を感じないし。

私は、一気に眠りのふちに落ちた。



連絡が途絶えたのはいつだったか。いつかの日、確か、私はあの約束の場所に行けなかった。急な仕事を立て込んで、気付けば、日付もとつくに変わって。それ以来、会っていない。もう何ヶ月経っただろうか。確か、おとといは、彼女の誕生日であったはずだ。毎年、欠くことなく祝っていたのに。今年はできなかった。毎年、何かは贈っていた。小さい頃、初めて贈った、『白い花』。名前は知らなかったけれど、美しかった。小さく、可憐に強く咲くその姿に、彼女を重ね合わせていた。

「もう少し、別れる前、手段を選べばよかったな」

呟いても遅い。連絡手段を与える機会は何度もあったというのに。愚かな、自分。憎い、自分が。心配はどんどん積もっていく。

顔の筋肉が、硬くなりそうだった。

「クラピカさん、仕事」

「あ、はい」

目の前のことで、いつもみたいに手いっぱいだった。

## 目覚めた夜

カーテンの隙間から、夜の景色がのぞいていた。真っ暗な中に、かすかなネオンが光る。

赤いカーテンの部屋。はて、ここはどこだろう。身体を起こすと、悪趣味なまでに赤いベットシートに目がいく。

「（ここは？）」

「おはよう、いや、こんばんは」

「どこ、ここ」

「ボクの部屋」

「あ、そう」

「今から、ボク、仕事だから」

「え？」

「寝ててもいいし、自由に使って」

「・・・いや・・・でも」

「誰か、待ってる？」

「いいえ、帰る場所はないから」

そう、帰るべき場所はない。今日だって、どこかで野宿か、安い宿を取るはずだったし。

「じゃあ、ね」

「・・・お言葉に甘えるわ」

「うん、良い子」

「・・・」

「しばらく居るといいよ」

「しばらく？」

「イヤになれば出て行けばいい」

「日数の話？」

「もちろん。好きなだけ、過ごせば良い。君に興味を持った」

「・・・娼婦じゃないわ」

「分かってるよ。ごめん、ごめん。じゃあ、ボクは一旦、仕事に行って来るから。朝になったら帰ってくると思うよ」

「分かったわ」

直ぐにヒソカは出て行ったようだった。扉の閉まる音が玄関のほうからした。

このベットはあの人と同じような、不思議な匂いがする。少し柑橘めいた、ミステリアスな香り。イヤじゃない。それよりも酷く落ち着いた。

「どうしよう・・・やることないし」

とりあえず、ベットから出ることにした。

あまりの仕事の多さに身が持たない。酷く、最近は疲れている気がする。仕事が終わると直ぐにベットに入って眠りにつく。シャワーを浴びるのも、最近は朝の日課になってしまった。面倒なのだ。夜はとにかく眠りたい。ハンターではないが、雇われの警備として名のあるグループの、ボディガードをしている。

ふと、無作為においてあった新聞に目が留まった。『ハンター試験、今年も開始』

「・・・ハンター？」

前々から気にはなっていた。一体、どういうものなのか。一般人が立ち入り禁止の区域にも、ハンターなら入れるらしい。莫大な資産も手に入ることもあるとか、ないとか。とにかく、今より随分と生活がしやすくなるそうなのだ。

「・・・好条件なのだが・・・一体、どういうものなのか」

考えては見たが、今はそれより、眠たさのほうが確実に勝っていた。とりあえず、眠ってしまおう。今、考えるのは無理だ。

頭まで深く、布団を被り、眠りについた。

「今日、スーツ？」

「やあ」

「ヒソカ、趣味変わった？」

「いいや、ちよつとね」

「いいと思うけれどね」

シズクは小首をかしげながら、そういった。

「今日はどうするの？」

団員からの、何気ない問いに、クロロが静かに口を開いた。

「盗みにいく。ヨークシンシティにあるビルにある、翡翠の涙だ」

「翡翠の涙？」

「計画を説明する。よく聞いておいてくれ」

「はい」

幻影旅団が、ひと暴れする。まるで嵐の前の静けさのように、街はいつもどおり、ネオンも煌いていた。

## 久方ぶりの夢の中

あまりに深い眠りについていたせいなのか。久しぶりに、夢を見てしまった。

あれは多分、村のはずれにあった、池。美しく風にたなびく木々の陰。ああ、懐かしい。水のおいも、何もかも、心地よく懐かしい。ああ、帰ってこれたのか。

村に戻ったら、先生のところに行って剣を教えてもらわなくっちゃ。ジュールたちに負けてる。早く、強くなって、一人前になりたいし。何より

・・・。

「クラピカ」

「・・・なんだ、いきなり・・・驚いた」

「驚かせた？ごめん」

「抜け出してきたのか？」

「お裁縫、苦手だもん」

「そんなの練習しなくては、うまくならないに決まっているだろう」

「そうだけれど・・・イヤよ、私も剣を習ってみたい」

「私たちの習い事だ。マリアはいけない」

「何でよ」

「私たちが剣を習うのは、守るためだ。マリアたちは、私たちに守られていればいい。それが私たちの幸せだ」

「・・・そう、悪い気はしないわ」

「素直ではないな」

「うるさい」

「戻ろう」

「ん？イヤよ、折角抜けてきたのに」

「どうやって？」

「”お腹痛い”って迫真の演技で」

「・・・あきれたものだ・・・」

「それで結構」

「・・・」

隣に黙って、また腰を下ろした私を驚いた目で見た。

「戻らないの？」

「いるのだろう、まだ」

「そうだけれど」

「剣の稽古は生憎、今、休憩中だ」

「休憩中？」

「ああ、怪我した」

「えっ・・・クラ」

「私ではない」

「・・・そっか」

「骨を折ったらしい。先生が手当てをしている、じきに終わるだろうが・・・まあ、いいさ」

「適当ね」

「マリアには言われたくないものだな」

私が笑ったように、そういうと、マリアはふてくされたように、そっぽを向いた。そういう顔も、可愛いと思いつ出した、最近。私の中にも、こういう感情はあったのか、と。妙にむず痒くって、恥ずかしくって。くすぐったかったけれど。

「失礼ね、本当に」

「・・・もう決まったのか？」

話題を、何気なく婚礼のほうに向けた。

私たちの民族では、女性は17を迎えたら、嫁ぐのが決まりだ。嫁ぎ先も、星の導き、相性も最も良い相手のところに決まる。マリ

アの場合、少しはなれた丘に住む、アステカのところだった。今年で25になる奴のところだ。

アステカは、少し口が重いが、剣は達人並み。先生の次に強いし、何より博学。それに、面白い人だ。私としても、それなら、というぐらいだった。

「決まったわ」

「嬉しく、なさそうだな」

「お兄ちゃんみたいに慕ってた人だもん。イヤだわ、関係が変わっちゃうの」

「大丈夫さ」

「・・・クラピカはいいよね、男の子だもん」

「・・・」

「心配ないじゃない」

酷く傷ついたように、笑う、マリア。痛々しかった。ごめんって、いえなかった。それどころじゃない、罪悪感と、嫌悪感が押し上げてきたから。

「マリア」

「

「っ・・・」

息が苦しいくらい、つまっていた。一気に、溜まった息を吐ききると、肺が少し痛んだ気がした。

夢を見ていたらしい。あれは幼い頃の記憶。私たちがまだ、16だったころの記憶だろう。懐かしい夢を見たものだ。

しばらく、マリアには会っていない。元気にやっているんだろうか。何も、憂いていないことを願うばかりだ。心配事は、彼女には似合わない。彼女には、そんな顔、してほしくない。

「マリア」

返事の返ってくるはずのない、名前を呟く。

すると突然に、扉が強く開かれた。

「クラピカっ・・・起きていたか、まずい、翡翠の涙が奪われた！ 追うぞ」

「はいっ」

会いたい  
・・・ たったひとりの同胞に。

夢を見た。とても懐かしい夢。駄々をこねていたあの頃。駄々をこねることも許されていた、守られていたあの頃。

「・・・懐かしいなあ・・・」

呟く、と不思議と、涙が出てきた。懐かしい、恋しい、戻りたい、帰りたい。お母さん、お父さん、クラピカ。会ってないね、とても長い間。会いたいよ、少しでも。連絡する術がないの。どうしても。会いたいんだよ。どうしても、会いたいよ。恋しさ、積もっていく。まるで、風に吹かれ、積もる落ち葉のように。積み重なっていく、感情。

赤いシャツが、さらに濃い赤に染まっていく。

視界が赤くなるのが分かった。ヒソカに戻ってくる前に、沈めなきゃ。忘れなきゃ。下手したら、殺されてしまうかもしれない。売られてしまうかもしれない。昔、この市場に出てきた頃は、よくあった。もうそんなのは、イヤだ。

鎮まれ、鎮まれ。忘れろ、忘れろ。大嫌いだ、この赤い目が。この目のために、殺された同胞。この目を持ったばかりに。苦しい、イヤだ。憎い、キライだ。

「戻って・・・」

苦しい。

こんなに目の赤い夜は、暗い同胞の瞳が嘆くようだ。私をただ見つめて、暗い瞳で。私を忘れてはくれないのね、同胞よ。



今、仇をうつからね。待ってて。苦しめないで。分かったから。  
「戻って・・・」

「ただいま」

玄関から、そう呟いた。初めてかもしれない。マチがここに来たときすら、言わなかったのに。不思議な子だ、あの子は。

布団で眠る、マリアの傍のシーツは染まっていた。泣いたあとがある。涙の筋が、まだ、残っている。

「なにか、思い出した・・・のかな」

その頬を、さっと拭くと、静かにマリアは息をした。

## 優しくない朝日

日はまた昇る。希望の朝も、悲劇のあとの朝にも。同じように明ける朝が、あまり好きになれない。きつとあの日が、全てを決めてしまったんだろうね。本当なら、望むべき朝を、嫌ってしまっただろうね。寂しい、性。

「・・・」

「やあ、おはよう」

「いつから、そこに」

「君の目が覚める、三時間前から」

「・・・暇じゃなかった？寝なかったの？」

「うん、まあね」

「変ね」

「よく言われるよ」

「・・・何？」

「なんでもない。朝ごはんにでもするかい？」

「んゝ・・・ん」

「曖昧だね？」

「うん・・・あんまり食べるほうじゃないから・・・いいかなあ・

・つて」

「ああ、なるほどね」

「・・・」

「ボク、もうすぐしたら、数日空けると思う」

「数日？」

「うん。もしかすると数ヶ月かもしれないけれど（家に帰る習慣なかったし）」

「何をしにいくの？」

「うん？君も行くかい？ハンター試験」

「ああ、ライセンスの・・・いい。いらないから」

「そ。まあ、いいけれど（そっちのほう为好都合かも）」  
「ん」

「自由にしてていい。この部屋も、家も。帰ってくる保障はできないけれど」

「いいよ、私、放浪癖あるし」

「また君に会いたいからね」

「・・・」

「じゃあ、そろそろ準備していくよ」

「え？もうすぐって・・・そのもうすぐ？」  
「ん」

「・・・ばいばい」

「ばいばい」

多分、言葉を失うってこういうことを言っただろう。  
しばらく、その場にぼうつと座っていた。

「ええっ、辞める？君の働きは十二分に評価をしたつもりだったんだけど・・・」

「そうではなくて」

「何が不満なんだい？」

「ハンター試験を受けに行きたいので」

「クラピカ君？何も、全て投げ打つ必要は・・・」

「分かっています。けれど、片付けてから行きたいんです」

「・・・そうか」

「お願いします、ボス」

「うん、うん、分かったよ、了解した。受理することにする」

「ありがとうございます」

「その代わり」

「・・・はい・・・？」

朝が嫌いだ。人と別れるにしても、夜別れるより、朝別れたほうがこたえる。精神的に参る部分が、大きい。私は、ずっとそう思っていた。

背を押す人も、ものも、何もなくなってしまった今。私は、そう思っていた。

失うものなど、何もない。崖っぷちでいい。誰かがそういつていた気がする。もしかすると伝記か、何かかもしれないけれど。少なくとも、その言葉が、私をここまで生かせている。

今日、やっと。今朝、やっと。嬉しく思った。朝が来たことが。朝、その始まりのありがたさが。

『その代わり』

『・・・はい・・・？』

『絶対、受かって来い』

『はい』

『応援している。ああ、これは餞別だ。せんべつ 持って行ってくれ』

『ありがとうございます』

『また、仕事をしたかったら、おいで』

『はい』

『いつてらっしゃい』

『行ってきます』

こんなに満ちた朝があること、今日まで知らなかった。希望の朝なんていうのは、タイトルだけじゃなかったんだ。

「・・・行ってきます」

## 優しくない朝日（後書き）

どうしてもヒソカの会話文に、ハートとか、スピードとか入れるの面倒で・・・ごめんなさい。ご了承を。

## 奇術師のおい

ヒソカからいつもしていた。クルタの最後の日のにおい。あの、村に帰ったときの、におい。無力感に、教われた。悲しい、におい。ヒソカからは、その断片的なおいがした。近づくたびに、脳の奥がしびれるような錯覚を覚える。それはどこか、悲しくて、懐かしい。あの幸せな記憶と、惨い記憶の断片が脳内を駆け抜ける。走馬灯みたいに。

ぎゅっと自分を抱きしめて。しっかりしなきゃって。いつまでもあの男の帰りを待っているわけにはいかない。情報を探さなくっちゃ。それが本命だもの。私は、そのために生きているんだから。

最初から思っていた。44番は、まずい。血のにおいを感じていた。

「クラピカvsヒソカ！」

審判役の男の、力強い始まりの合図で、幕を開けた。出来れば、この男と対戦したくなかった。あまり好ましい、対決ではなかった。望むといったら言葉が変だが、こんな試合は、望んでいない。

「イイよ、抜いて」

「・・・そのつもりだ」

トランプの、音がやけに耳に障る。集中したい。氣をとられてしまふ。私と、したことが。

「おと・・・トランプは半分じゃゲームできない。君も同じだよ。それじゃ、つまんないから・・・しっかりしっかり持ってる」

「・・・失いはしないさ、絶対に」

「だとイイよね」

トランプが投げられた。ああ、馬鹿馬鹿しい。こんなのどう返っ

てくるか、分かりきつてるじゃないか。どういうことだ。こんな分  
かりきつた軌道で、投げてくるなんて。

それより何より、ずっと微笑を絶やさないこの男。押し殺しては  
いるものの、漏れ出す殺気は抑えきれないようだ。ひしひしと、目  
に見えない細胞一つ一つに確実に感じていた。

「イイこと、教えてあげようか」

「何だ」

「君さあ、もう負けてるんだよね」

「なぜそういえるっ」

「フッフ・・・でしょ」

私が剣に目を向けたと同時に、そういった。ヒビが、入っている。  
さっきの分か。いや、違う。さっきの攻撃はこれが目的であったか。  
迂闊だった。

「1本でいい」

「・・・ねえ」

「何だ」

「ボク手加減してるんだけど・・・抑えられなくなっちゃうよ」

「・・・だからどうした」

「ああ、たまらないね・・・またゾクゾクしてきちゃった・・・

ああ・・・重なっちゃう・・・君、ボクの知り合いによく似ている  
よ」

頭の隅に、マリアが過る。昔、よく2人でいたら、見分けがつか  
ないといわれたことがある。血は、そんなに近くないのに、なぜだ  
か顔は、瓜二つなのだ。最も、今でも多分、マリアが髪を切れば、  
見分けはつかない程度だろう。少しマリアのほうが、小さいが。

「・・・」

「君によく似ている・・・声までも」

「だからどうしたっ」

「たまらないよ・・・彼女の戦い方を見ているようで」

「・・・っ」

やはり、勘違いではないかもしれない。ヒソカが言っているのは、紛れもなく、多分マリアのことだ。

目の前が真っ赤に変わる。

投げられたランプが、そっくりそのそのまま、ヒソカの肩に刺さった。

覚悟はしていたものの、やはり尋常じゃない。ヒソカの顔は、まるで狂気に歪んでいた。

でも、それとすぐに、さっきまでの顔に戻って、両手をあげた。まるで降参でもするかのように、こちらに向ってくる。

『で、待ってるよ・・・それから・・・マリアも君も知り合い同士、かな。同じにおいがしたよ』

「・・・え」

「ボクの負けでいいよ。次で決めることにした。いいだろ、別に」マリアが、ヒソカと接触している

・・・？

待てないわ。待てないの。私のこの身は、ただクルタの復讐のためだけに。この心臓は動いている。また街にいかなくてはならない。行かなくては、ほしい情報も何も、得られない。

『お世話になりました』

紙切れをテーブルの上に残して、扉を閉めた。

さよなら、おかしな人。



## 意外な接触

仕事を預かった。よりにもよって、試験の帰りに。めんどくさいとか、思いつつもちゃんとしちゃうんだから。ちよっとお人よし過ぎるってもんかな。まあ、有料だけれど。

付き合いが長いから、仕方ないってところもあるのかも。まあ気まぐれだし。何より、今は仕事も入ってなかったからね。でも、ライセンスも取ったことだし、さっさと仕事したいんだけどなあ。

漆黒の長髪を揺らし、ひとりで闇市場へ出向いた。

ヒソかに、頼まれた。随分と久しぶりの依頼かもしれない。いや、初めてかな・・・分からない。まあ、いいや。今回は殺人じゃないから、断ろうかとも思ったんだけど。随分とイロをつけてくれたから、やることにしたけれど。普段なら、伝言程度に、わざわざ動いたりしないからね。

『イルミ』

『何？』

『頼まれごとがあるんだ』

『何？』

『頼まれてくれないか？』

『内容による。殺人なら無論構わないけれど』

『ああ、殺人じゃないよ。悪いけれど。伝言してほしいことがあるんだ』

『専門外だけれど』

『できないわけじゃないよね？イロ付けとくから』

『どれくらい？』

『そうだね・・・うん、一旦、30000。終わったら70000支払うよ』

『うーん・・・』

『伝言だからね・・・おそらく、家にはもういないと思うんだよ』  
『家?』

『ボクン家』

『（近くに）家あったの?』

『失礼だなあ・・・まあいいや。うん、この前までは一緒に暮らしてただけだね。多分、出て行ったと思うから。探してほしいわけ』

『いいよ、そこまで言うなら、分かった。で、何?』

『・・・って伝えてほしいんだ』

『分かった』

ハンター試験会場から、真っ直ぐ向ってきたけれど。2時間もかかるとは思わなかった。僅かな空腹感を感じ始めた。そういや、随分食べてないか。さっさと終わらせて、何か食べよう。

あの、出て行った日から。情報はこれっぽっちも掴めなかった。

約束の場所にも行った。けれど、クラブ力は現れなかった。何となく、分かりきっていたことではあったけれど。頭の片隅、予測できたことではあったけれど。なんとなくの、虚無感。何もしたくなくなった。どこかで情報が出てこなくてもいいかなあって。そう考える一瞬はあった。けれど、それ以上に、夜毎必ず夢を見て。あの同胞たちが語りかけてくる。真っ暗な空洞で。そうして、苦しくなつて。また歩き出すをやむを得なくなるのだ。

「そろそろ仕事探さないとなあ・・・」

「姉ちゃん、幾ら?」

「は?」

「いくらかって聞いているんだよ。一回、だめか?」

「幾ら出すつもりだ?」

「額によるのか・・・手持ちはあんまりないからなあ・・・そう

だな、80000くらいかな」

「結構。それならいい。相手にする気はない」

「・・・はっ、このア」

「じゃあ、俺が200000出そうか」

黒髪の、妙に目の大きい人。つややかな髪は、まるで女性のよう。しかし、それを十二分に否定できるだけの筋肉が、その身体に纏われていた。

「あなた？何？」

「伝言を預かっているんだ。少し時間がほしい」

「分かった。ごめんなさい、私、こっちの人と行くわ」

「・・・分かったよ」

軽い舌打ちを含んで、さっきの男はさっさと踵きびすを返した。

「じゃあ、場所を変えよう」

「お金は結構」

「要らないの？」

「いいわ。そういうつもりじゃなかったし。伝言料、必要？」

「貰ってるし、追加で貰う予定だから、いいよ」

「うん、そう」

割と近くの路地の裏に入る。途中、壁のへこみを撫でると、そこは朽ちた木の扉が取っ手をなくして隠れていたようで

気味の悪い音を立てて、開いた。

妙に薄暗い光が入り込んでいて、ほこりっぽくって、変な空間だった。

「ヒソカから、預かった」

「ヒソカ・・・」

「彼、君を知ってるらしいけれど、合ってる？」

「合ってるわ。マリア、私よ」

「うん、よかった。率直に言う。ヒソカの元へ帰って」

「何で」

「探してる、結構、真面目だよ。何があったか知らないし、知っ

たこつちやないけれど。戻って、家で待ってるかも」

「そういう人なのかな・・・」

「多分、次は手段も選ばず、君を探し出すと思う」

「・・・」

「『言いたいことがある』って。直接、会って」

「・・・」

「一応、伝えたよ。俺も暇じゃないし、疲れたから」

「・・・」

「今から帰ったら、いるかもね。2時間ちよつと前に試験終わってたから」

「・・・」

「帰ったほうが賢明だと思うよ。君が痛い目、あいたくないならね」

「痛い目？」

「昔かなあ・・・気に入った子がいたと思うんだけどね・・・その子、割と直ぐに死んじやったね」

「死・・・」

「本能的に狩っちゃったのかな・・・もしかしたら、熟れたのかも」

「・・・」

「良いこと教えてあげるよ。ヒソカは青い果実にしか興味ないんだ」

「・・・」

「まだ死にたくなかったなら、帰ることだね。まあ、言ったからね。あ、帰り道、分かる？」

「・・・うん」

「じゃあ、気をつけて」

「・・・」

「次、君の死体に出会わないことを祈るよ」  
「・・・」

ずっと、すぐに消え去ってしまった。  
私はまるで、死の宣告を受けた、患者のような、  
気分には陥った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3890z/>

---

緋色の記憶

2011年12月16日19時54分発行